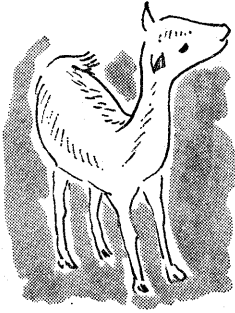


幼児にとつての

「自分」

南 館 忠 智



1 「サンサイタモン」

珍しく日中、家で書齋に閉じこもったとたん、外で遊んでいた娘たちが友だちと一緒にドヤドヤとかけこんできました。ひところ友だちと遊ぶのが苦痛のふうだった娘たちも、どうやらその時期を乗り越えたようでもた朝から夕方まで、大きい子と小さい子と、泣かされたりけんかをしたり世話を焼いたり、「忙しい生活」を楽しんでいるようです。きょうは一―二歳年上の子たちと五人グループ、それぞれお気に入りの楽器をもち出して「ガッソウ」が始まりました。そのにぎやかさといったらモウ大変なものです。いづれ一時間もすればこの豆台風、またカシ（河岸）を変えること間違いないうのですが……。それにしても豆台風という表現、その語感といい後に残る余韻といい、なかなかピッタリと感じ。いいですね。

ところでこの二人の娘たち、先日、母親と一緒にかかりつけの医院へ出かけたのだそうです。夕食の際、自分たちから進んで報告するところによると、

「ジブンデネ、チャントコシカケテネ、トントンシテモラッタンダヨ」

母親に抱っこしてもらわずに椅子に腰かけて、打診やら聴診やらしてもらった、という次第です。それが得意でしかたがないようですが、ことばの端々に、動作に、表情に、ありあり。

これには伏線があつたのです。彼女らは、つい半月ほど前、「サンサイ」になつたことがうれしくてうれしくて、大得意。「オカアサン、シマチャン ナンサイナッタ キイテノ」と一人がせがむと、もう一人も負けじと「オトウサン、ナンサイナッタ エリチャンニモ キイテノ」と催促。また、「ユビガ シロクナッタヨ」とやつて来て、指をしゃぶるからだネと言われ、「モウ ユビ シャブラナイヨ、サンサイダモンノ」。それに加えて、「ネルトキ タオル イラナイヨ」とオシャブリ放棄宣言まで上げ、親の方がびっくり。その後、これらの宣言がほほキチンと実施に移されているのに、親は二度びっくり。

そしてきょうは母親の手を借りずに診察してもらつた、というわけです。もらつて来た薬も自分で飲んでいきます。聞いてみると、真顔で「オイシクナイ」との答え。彼女らの言う「ガンマン」（我慢）を励行しているらしく、一年ほど前までガンとして口を開かず、医者公認（？）の薬ぎりだったの

がまるでウソのよう。

などと書くとは、まるでイイ子みたいに錯覚なさるかもしれませんが。いずれにせよ、これに類する経験はさして珍しいものではありません。子どもが得意でしかたがない気持ちではありますまい。子どもが得意でしかたがない気持ちを、それこそ全身で表現するのに一度も出くわしたことがない親が、また保育者がいたとしたら、それこそ不幸というべきでしょう。この日の出来事のうち、筆者の最大の関心をひきつけたのは、ちよつと別のところにあります。

2 「オカアサンハ モウノ」

娘たちの話を引きとつて、母親はこんなことをつけ加えたのです。聴診や打診は本人たちの言うとおり。口を大きくあけて、との指示にも素直にアーンをしたのだけど、ベッドの上におおむけにされ、おなかを触られる段になると、心おだやかならず。くすぐりたいやら、少々気はすかしいやら……。そして飛び出したことばが、

「オカアサンハ モウノ」

ああむきという無防備に近い状態にしておいて、おなかをコチョコチョするとは、フェア・プリーの精神に反する。だいたい、おなかを丸出しにするなど、赤ちゃんに対してならい

ぞ知らず、「オネエチャン」に対して失礼千万。それにしてもこの姿勢では、抵抗するにも思うにまかせない。残されたテは、もはやたった一つ。ことばによる「攻撃」あるのみ。

高速度撮影されたフィルムを見返す感じで彼女の心境を推察してみるなら、多分こんなことになるでしょう。ここでユカイなのは、彼女が「オカアサンハ モウノ」と叫んだ点でず。自分をかくもくすぐったく、気はずかしい目にあわせている「元凶」がイマナカセンセイにはかならないことを、彼女は十二分に承知していたはず。それにもかかわらず娘は、「センセイハ モウノ」とは言わなかった。そばにいて自分をのぞきこんでいた母親に、攻撃の照準を合わせたのでず。「オカアサンハ モウノ」あの危機的場面で発したこの一言。これはもう、筆者にとって心がゾクゾク騒ぐ、ユカイな一言です。直観的に、そうなのです。ネ、あなたもそうでしょう、と気安く肩をたたきたくなるほどユカイなのです。困っちゃいますね、なぜそうなのかを説明しなければならいなんて、モウ。お前の「語録」に忠実であろうとする限り、お前にはその義務がある。そうですか。確かにそうですね。でも、それにしても気が進まないナア。

それでは、こんなことを考えてみましょう。もしかりに娘

の視野に「センセイ」の姿しかなかったら、彼女はどうかだろうかと。これはまったく仮空の場面にかかわりますので、正誤の判定は困難です。しかし筆者自身は確信にも似た感じで次のように言いけることができます。彼女はフフンと少々オーバーに身をよじるとしても、またもう少々うらめしそうな眼差しをセンセイに向けるしても、それ以上のオーバー・ビヘビア（あらわな行動）はみせなかったであろう。と。「センセイハ モウノ」の一言は、絶対に出なかったであろう、と。

それでは解答になっていない。義務を履行する気なら、なぜそのように思うのか説明せよ。ハイハイ、あなたはもう立派に筆者の「仲間」になってくださったようです。結論（めいたもの）を引き出したから、それで終り、ではいけない。どのようなプロセスを経たのか、たどった過程をだいにしたい。まさにそのとおりですネ。

3 子どもと大人は違う、のだが

ではここで、腹をすえて、できる限り自分に忠実に述べてみようと思います。後で辻つまを合わそうとした部分が少なくありませんので、多少ズルイ解答になりそうですが、悪し

からず。鳴門の渦潮のようにという表現の当否はともかくとして筆者の心の中には絶えずいくつかの渦が巻いています。大きさを換え、速さを換え、位置を換え、あるときは二つが一つに合体し、またあるときは逆に一つが二つに分割され、絶えることなく渦巻いています。

それらの渦のうち、近ごろ、大きくはなったのだが回転が遅くなって、筆者をヤキモキさせているのが、(第四回でも触れた)発達にかかわる教育作用の位置づけの問題です。教育ないし保育という営みが子どもたちの発達を促す、と把握することに誤りはないと思います。しかし、教育ないし保育という名のもとになされている働きかけのすべてが、現実とそのとおり機能しているかどうか、これは吟味を要する事柄に属します。無条件にイエスの回答はできそうにありません。ここまでは大方の皆さんの賛同が得られそうです。

問題は次です。それならば、どうすればよいのでしょうか。これまで五回にわたってあれこれ述べてきたことの根っこも、すべてこの点に連なります。今回はこれを、子どもは大人と違う存在だ、とする「常識」を疑い直そう、というかたちに表現してみたいのです。今世紀は子どももの世紀、というスローガンのもとに、ようやく「正当に」評価されるよう

になったこの「良識」を、疑い直すとは何事か、とまたまたお叱りをうけそうです。しかし、本当に違うのでしょうか。と言うよりも、何のために、違うと把握する必要が生じてくるのでしょうか。

たとえば、幼児は自己中心的存在だ、とするらえ方は幼児教育界のすみずみにまで行き渡ってしまったようです。このことばを用い始めたのはピアジェ (Piaget, J.) だとされていますが、その際、彼にはこの用語を採用せずにはいられない強い問題意識があったはず。かれこれ五十年も昔のことです。ひるがえって、今日のわたしたちはどうでしょうか。このレッテルを子どもにはりつけ、それによって自己満足を得ているに過ぎない。こう評したら過言あるいは的はずれでしょうか。

子どもがパパは「オジサン」でないと言い張ると、なるほど幼児は自己中心的だ、したり顔。オモチャを独占しようとする、幼児って自己中心的だからネ、と解説、無茶苦茶なけんかでも始めようものなら、ウンこれこそが真の子どもの姿、などと満悦。これでは、自己満足と決めつけられてもグウの音も出ますまい。要するに子どもは(自分のあずかり知らぬところでレッテルをはられただけで)放っておかれる

のです。その後には可能なはずの（よりハッキリ言えば、その後につづくべき）一連の働きかけ合いが、大人の側から一方的に断ち切られてしまうわけです。

さらに悪いことに、このレットルはやたらにベタベタはられがち。中には明らかに誤ったはられ方も少なくない。自己中心性という用語は、筆者の理解するところ、一つの事物・事象が二つ以上の視座からみられ得ることに気づいていない心性、とりわけ、自分と他人との関係理解の不十分さのゆえに生じるそのような心性を表現するためのもの。したがって、利己的傾向とはまったく異なるはず。自他の利害関係を十分のみこんだ上で自分の利益をはかるのは、これはまったくの別物。それなのに現実には、という次第に相なるのです。

4 子どもを見る大人の目

もっと悪いのは、ハイわかりました、とばかり勉強したての誤りない（？）知識で、またはレットルはりに専念されるご仁の出現です。こんなかたに限って、幼児は純真そのものの、利己的な心などあろうはずがない、とかたく決めこんでしまわれがち。何のことはない、メガネを替えただけで依然として色メガネで子どもを見、そして、それに合致しない部

分を切り捨ててしまわれる。落ちつく先は同じ、自己満足。こうなっては正直なところ、お手上げです。

以上のところから、当面二つの事柄が注意事項として上ってくるはずですが、まず一つは、自分が用いることばについてはその意味する内容をできる限り吟味しておくべきこと。これは原典に忠実であるためにという以上に、その用語を互いに口にする仲間どうしが正確なコミュニケーションを確立するために必要だ、と言うべきでしょう。同じ用語に別々の意味をこめて使っていたのでは、話がこじれてしまうばかりです。原典に立ち戻るのは、互いに精確な概念規定を共有するための手段だ、と言い切ったら便宜主義に過ぎるでしょう。

もう一点は、先ほどの点が満たされた上で、その用語の使い方には十分慎重になさるべきこと、です。これにはいくつかのポイントが含まれます。誰の目にも明らかなのは、それを色メガネとして使わないこと、でしょう。色メガネを通して見ると、この多様な世界がなんとも単純化されてしまいます。最もひどい場合には、子どものなす事すべてが自己中心的にうつります。これは、色メガネの主が自分もハッキリ意識できぬままそれ以外の部分を切り捨てている結果にほかな

りません。

この落とし穴を注意深く避けられたとしても、次の危険が待ちかまえています。「それ以外の部分」が実はいろいろ違うのに、自己中心的でない、として一括されてしまう傾向が、それです。この傾向はとて強く、これから抜け切ることはかなり困難。わたしたちはついつい、この子はまだ自己中心性が目だつけど、あの子はもうそろそろ「卒業」が近いなどと、この危険のトリコになってしまっているのです。

そこで次に、この危険をも打ち砕く手段を編み出す努力が必要となります。どうすればよいのでしょうか。結論から言えば、レッテルはりをやめること。それに代えて、子どもたちとどうかかわるのかを再検討すること、に尽きると思います。レッテルはりがたかだか子どもの現状追認にとどまることは、すでに明らか。むしろ、この子どもたちが今後どのように伸びていくのかどのように伸ばしてやろうとするのか、未来へのつながり、広がり、深まりを、視野の中にキチンととらえようとする努力が欠かせません。

それではここで、2で述べた事例に立ち帰りましょう。娘が発した「オカアサンハ モウノ」の一言。それは八つ当たりで過ぎない、として片づけてよいでしょうか。手もとの辞

典によると八つ当たりとは「その事に関係の無いものにもでだれかれの区別なく当たり散らすこと」そうだとすれば、ちょっと違うようです。視野の中にもし看護婦の姿があったとして、「カンゴフサンハ モウノ」は聞かれたでしょうか。

筆者の答えは、どうしても「ノー」です。娘は自分を取りまく人とひとりひとりと「その時点までに形成されていた自分」とのかかわりを読みとり、その場の状況をも察知した上で、自分のふるまい方を決定したと思われる。他者とのかわりの中で自分自身を知り、つくっていく、とする説を認めるなら、この幼い行動とわたしたち大人の行動との間にどのような違いを見いだせばよいのでしょうか。幼児自身にとつての「自分」というテーマも、未解決部分が少なくないようです。

5 おわりに

さて、このへソ曲がりの小論、はじめ数回という予定でスタートしたのですが、今回が第六回。もう「引退」すべき潮どきです。

ふり返ってみると、少しばかりの苦しきをはるかに上まわる楽しい仕事でした。日ごろボンヤリ見過ごしているあれこ

れの点をやや丁寧に拾い上げ、みつめ直し、新たな立ち向かい方を模索する。今回の作業を通じて、ボンヤリ見過ごしてきた度合いが「ボンヤリ」感じていた以上にヒドイものだった、と実感できました。それだけにこの仕事、チャレンジングであると同時に、十二分にエキサイティングだったので。

なんのことはない、お前自身の無知に気づき、それをあらわにするだけではないか。こんなことは先刻承知、すでに必要な手ももうつてある。これこそまさにお前自身の自己満足に過ぎないよ。こんな声が聞こえてきそうです。ハイごもっとも、と申し上げたい。「謙虚さ」が心の一方にあります。しかしました、イヤそんなはずはない、という「不遜な」気持ちの心の片すみに残るのも隠し切れません。

この辺の事情を考えると、公共性を増すことがお互いにとって必要と思われてきます。それで、今回のシリーズを閉じるに際して、一つの提案をしておきます。もし許されるなら、次の機会には「キャッチボール方式」を採用してみたらいかがでしょう。どなたか「好敵手」とともに登場して、ひと月おきに交替で筆をとる。Aの提案に、Bはコメントを加え、新たな問題点を指摘し、それを受けてAは考察を深め、

Bにバトンタッチする、というスタイルです。

この方法の採用によって期待される利点の第一は、「逃げ」が少なくなること。一人だけだと、どうしても困難を回避してしまいがち。この悪癖が多少なりとも改善されそう。第二点は、この協力作業によって「書いてない部分」を読みとることが促進される、と予想できる点。自分の中でモヤモヤと存在はしているのだが正体不明の部分が、しだいにハッキリしてくるだろう。そして第三に、その問題の解決方法についてもより多くの道が開けてこよう。それは決して二人分の「加算」ではなく、「乗法的」に働きあうはず、等々。つまるところ、共有できる特有性をわたしたち相互の間に確保し、増していこう、ということです。

さてもさても長い間、辛棒つよくおつき合いました。ありがとうございました。

(三重大学)